

手と手と手

岡山発 国際貢献

イラクに派遣されていた陸上自衛隊の撤収が、間もなく始まる。国論が二分されたなかでの約二年半に及ぶ事実上の戦地任務だった。投入された自衛隊員は五千五百人に上る。「顔の見える国際貢献」がうたわれたが、果たしてそうだったか。評価ができる情報を、政府は国民に十分提供しただろうか。

連載を終えて

疑念もぬぐい得ないが、国際貢献とは、当然ながら政府主導である必要はなく、多様なかたちがあつていい。武器を持たず素手で取り組め、地方からも参入できるものならなおさらだし、そういう平和的な貢献こそが、国際社会から日本に求められているのではないか。そんな思いで取材を始めた。

現場を訪ねる

国際貢献は、いうまでもなく理屈より、行動である。私たち取材班は、その現場を克明に訪ねることを基本にし、取材地は十カ国に及んだ。一昨年末のスマトラ沖地震、今年五月のジャワ島地震と二度も大地震に見舞われたインドネシアの被災地をはじめカンボジア、ラオス、スリランカ、東ティモール、インド、中国、韓国、アジア各国に、アフリカのザンビア、マラウイである。

それらに立ってないけれど、そこにはNGO(非政府組織)など、経済的、精神的に支援するといった手段があり、それも立派な貢献活動ととらえた。

直し、省エネやリサイクルに目覚める、そのことだつて、地球の持続可能性を考へる意味ある活動である。世界の人口六十五億人のうち先進国に暮らす人は一割程度に過ぎない。経済格差の拡大に加え、

困、食料危機、環境の悪化、エイズなどの感染症のまん延に脅かされ、私たち人類はどう持続可能性を保ち得るかが、厳しく問われている。解決策は容易ではないけれど、ささやかであつても「できることをできる範囲で」、これも私たちが伝えてきたことの重要要素である。

にした。連載の終わりと時期を同じくして、岡山県内ではきよう二十九日、「岡山発国際貢献推進協議会」の設立準備会が発足する。NGOに経済団体、教育機関、メディア、行政などこれまで連携が十分でなかった多様な組織が手をつなぎ、つとう画期的な動きだと評価したい。

対等の立場で

国際貢献はまた、持てる者が持たざる者に施しを与えるなどということでは、決してない。支援する側される側、対等の立場で「手と手と手」をつなぎ、地球社会の持続可能性を高めるべく、困難な状況克服に努力をしていく、それこそが国際貢献の在り方だと、私たちは連載を通して明らかにした。

連載は年初から本日まで八十八回を数えた。「岡山発」を基本に報道をしてはきたが、全国各地で「顔の見える」「素手でできる」「日常生活で取り組める」そんな国際貢献の輪が広がることを期待したい。

国際貢献には、私たちが示してきたとおり多様な道がある。そこに「民の力」を生かして取り組んでいく平和的な貢献、それは求められているとともに、日本の役割ではないだろうか。



ジャワ島地震の被災地で緊急救援活動中のAMD A派遣日本人医師(右から2人目)ら。国際貢献は日本の役割ともいえる

各地に広がれ活動の輪

この連載企画は国際貢献取材班の横田賢一、清水玲子、斎藤章一朗、名合弘治、藤岡慎吾、太田知二が担当しました。

(完)